マリア・テレージアと天然痘[1)]
――ハプスブルク君主国における天然痘予防接種の実施

上　村　敏　郎

はじめに

1768 年 9 月 28 日、ハプスブルク君主国で 1 枚の記念硬貨が発行された。表面にはヨーゼフ 2 世とマリア・テレージアの横顔が向き合った形で刻印され、裏面にはラテン語で「フェルディナント、マクシミリアン、彼女の孫娘テレージア、オーストリア家の大公ら、天然痘接種から回復す」（FERDINANDUS MAXIMILIANUS EORUMQUE NEPTIS THERESIA. ARCHIDUCES AUSTRIÆ DE INSERTIS VARIOLIS RESTITUTI 29. SEPT MDCCLXVIII）の文字が見られる[2)]。この記念硬貨の存在は、ハプスブルク家の皇族に対して天然痘の予防接種が無事におこなわれ、当時のウィーン宮廷にとってその成功が顕彰に値する出来事であったことを示している。

ウィルスに右往左往するわれわれと同じように、18 世紀のヨーロッパの人々は致死率の高い感染症の 1 つ、天然痘の脅威と戦っていた。本稿では、こうした天然痘の脅威に対してハプスブルク家の女性君主マリア・テレージアがどのように立ち向かっていったのか、彼女の医療政策を明らかにすることで、時代

1）本稿は 2021 年 3 月 27 日におこなった獨協大学オープンカレッジ特別講座「ハプスブルク史への招待」をもとに加筆修正を加えたものである。また、本研究の一部は科研費（18K12539）の助成を受けたものである。

2）この記念硬貨については大英博物館の公式 Web サイトで確認することができる。https://www.britishmuseum.org/collection/image/1613737697（最終閲覧日：2022 年 2 月 1 日）

の境界に生きたマリア・テレージアのアンビバレントな性質について考察する。マリア・テレージア期の医療政策については、主としてオーストリア医療史の大家エルナ・レスキーの『啓蒙絶対主義時代のオーストリアの健康問題』[3]およびシュタイアーマルク州立文書館史料に基づくヨハネス・ヴィンマーの『啓蒙の時代における健康、病気、死』[4]に依拠しているが、適宜、アルネトの古典的伝記研究[5]やシュトルベルク＝リリンガーの最新の伝記[6]なども参照した。また、宮廷の様子をよく示す同時代史料である宮廷長官ケーフェンヒュラー＝メッチュの日記[7]、アルネト編集のものをはじめとする種々のマリア・テレージアの書簡集[8]、オーストリア国立文書館所蔵の式典議事録[9]を確認し、考察の手がかりとした。その他、同時代の出版物も参照しているが、それはその都度紹介することとする。

1. 18 世紀における天然痘の脅威

2022 年 1 月現在、次々と発見される変種により未だコロナウィルスの猛威

3）Erna Lesky, *Österreichisches Gesundheitswesen im Zeitalter des aufgeklärten Absolutismus*, Wien 1959.

4）Johannes Wimmer, *Gesundheit, Krankheit und Tod im Zeitalter der Aufklärung. Fallstudien aus den habsburgischen Erbländern*, Wien/Köln 1991.

5）Alfred Ritter von Arneth, *Geschichte Maria Theresia's, 7 Bd. Maria Theresia's letzte Regierungszeit. 1763–1780*, Wien 1876.

6）Barbara Stollberg-Rilinger, *Maria Theresia: Die Kaiserin in ihrer Zeit. Eine Biographie*, München 2017.

7）Johann Josef Khevenhüller-Metsch, *Aus der Zeit Maria Theresias: Tagebuch des Fürsten Johann Josef Khevenhüller-Metsch, kaiserlichen Obersthofmeisters, 1742–1776*, Bd. 1–8, Wien 1907–1972. とくに本稿では 6 巻（1917）を使用した。

8）Alfred Ritter von Arneth（Hrsg.）, *Briefe der Kaiserin Maria Theresia an ihre Kinder und Freunde*, Bd. 1–4, Wien 1881; Alfred Ritter von Arneth（Hrsg.）, *Maria Theresia und Joseph II. Ihr Correspondenz sammt Briefen Joseph's an seinen Bruder Leopold,* Bd. 1, 1761–1772, Wien 1867; Woldemar Lippert（Hrsg.）, *Kaiserin Maria Theresia und Kurfürstin Maria Antonia von Sachsen : Briefwechsel 1747–1772 ; mit einem Anhang ergänzender Briefe*, Leipzig 1908;

9）Österreichisches Staatsarchiv, Haus-, Hof- und Staatsarchiv（HHStA）, Obersthofmeisteramt（OMeA）, *Zeremonialprotokolle*（ZA-Prot.）.

はおさまっておらず、ワクチン接種による感染抑止、重症化予防がわれわれのできる重要な対策の1つであることは変わっていない。われわれが直面しているコロナウィルス同様に、18世紀において天然痘は治療法が確立していない病気であり、治療は対症療法しかなく、軽症で済むのか重症で亡くなるのか全く予期できないものだった。身分の高い低い関係なく罹患し、回復しても痘痕や後遺症が残る場合もあった。表1のように、ハプスブルク君主国の首都ウィーンではたびたび天然痘が流行し、多くの被害者を出してきた。

表1　ウィーンにおける天然痘の死者数[10]（1752–54年の天然痘の死亡者は全体死者の6.1%）

1728	1729	1730	1752	1753	1754	1755	1756	1777	1787
219	617	136	119	897	49	11	223	1153	1367

天然痘は貴賤を問わず罹患したため、歴史の趨勢にも大きな影響を与えてきた。ハプスブルク家の中にも多数の犠牲者が生じている。例えば、マリア・テレージアの祖父であるレーオポルト1世はもともと僧籍に入る予定であったが、兄フェルディナントが20歳で天然痘に罹患し亡くなったために、急遽即位することになった。そのレーオポルト1世の息子ヨーゼフ1世も1711年に天然痘が流行した際に罹患し、わずか32歳でこの世を去った。ヨーゼフ1世の死がスペイン継承戦争でのハプスブルク家の勝利を得がたいものにしてしまったことを考えると、天然痘が継承問題に与えた影響は非常に大きなものだった[11]。

マリア・テレージアも天然痘には苦しめられてきた。本人自身が罹患し、一時は死の淵をさまよったほか、16人の子供のうち天然痘で3名を失っており、また、その息子ヨーゼフ2世は妻2名を天然痘で失った。天然痘は王朝にとっ

10）Lesky, S. 145–146より作成。レスキーのデータはジークムント・パイラーのウィーン市文書館所蔵の死亡者名簿の調査およびウィーンの種痘医ヨハン・アントン・レヒベルガーの同時代刊行物に基づいている。

11）天然痘の脅威についてはStollberg-Rilinger, S. 507も参照のこと。

て継承問題に関わる身近な脅威であり、また人口を大量に損なわせる社会的な脅威でもあった。とくに、継承問題を経て即位したマリア・テレージアにとってこうした疫病は脅威だったと考えられよう。

君主国を代表する官房学者ヨーゼフ・フォン・ゾンネンフェルスは『ポリツァイ学・商学・財政学の基本原理』の中で「たとえば子供の天然痘のように、伝染病とほぼ同じくらいの荒廃を引き起こす病気もかなりある。こうした荒廃を防ぐことは市民を守るために必要な予防措置の一部である」と国家が天然痘の脅威に立ち向かう必要性を訴えた[12)]。18 世紀後半、天然痘の脅威は国家が向き合うべき問題となっていた。

2. 天然痘との格闘

本章では、マリア・テレージアがどのように天然痘に向き合っていったかを検証する。マリア・テレージア時代の宮廷では天然痘に罹患した場合、どのような対処をしていたのだろうか。式典議事録を参照しながら 1757 年に長男のヨーゼフが天然痘に罹患したときの様子を確認する。

1757 年 1 月 19 日の記録には、皇太子ヨーゼフの天然痘罹患の発表により宮廷だけでなく、ウィーン全体そして世襲領全体が心配したと書かれている。ヨーゼフは 17 日の晩に体調を崩し、祈祷をおこない、翌日 3 回瀉血をしたが回復せず、19 日に良性の天然痘が非常に大量に現れたという。マリア・テレージアはこれを受けて、すべての男子修道院、女子修道院およびプロイセンとの戦争のために毎日教会でおこなわれていた祝福のミサで公式に祈りを捧げ、とくにノイアマルクトのカプツィーナー修道院で毎日祈祷をおこなうよう命じ、そうした祈祷に彼女自身がお忍びで出席した。天然痘が発覚してから、宮廷内

12) Joseph von Sonnenfels, *Grundsätze der Polizey, Handlungs- und Finanzwissenschaft*, 1. Teil, Wien 1770[3], S. 244. なお初版で同様の箇所は S. 160–161 にあるが、ここで引用した第 3 版にある「こうした荒廃を防ぐことは…一部である」という文言はなく、1762 年冬に流行った胸の病気が紹介され、天然痘について具体的な記述は特にない。

の感染予防のため、ヨーゼフの居室は封鎖され、唯一教育係の部屋に通じる入り口のみが開け放たれていた。ヨーゼフの看護と監視の任に当たった人たちも等しく一緒に拘禁され、他の廷臣たちとの接触が禁じられた。式典議事録によると、次の 15 名体制で看護に当たったようだ。ヨーゼフの教育係だったバッチャーニ伯爵夫妻 (Graf von Bathyan[y])、元家庭教師ザウラウ伯爵夫人 (Gräfin von Saurau)、ヨーゼフの侍従ザルム伯爵 (Graf von Salm) とハミルトン伯爵 (Graf von Hamilton)、聴聞司祭ヘラー神父 (P. Höller)、侍医ファン・スヴィーテン男爵 (Baron van Swieten)、筆頭医師ハイン (Hayn)、テレージアの医師ヒューメルアウアー (Hümelauer)、元侍女と侍女、3 名の近侍、外科医フンブルク (Humburg) である。この隔離体制はヨーゼフの回復まで、見込みでは 3 月 1 日まで続けることが決められていた[13)]。ヨーゼフの天然痘は幸いなことに大事には至らず、2 月 1 日には宮廷礼拝堂で天然痘克服に感謝するミサがおこなわれ、テ・デウムがうたわれた[14)]。ここで確認できることは、治療法のない天然痘に対して、宮廷はまず神に祈ったということであり、またそれと同時にしっかりとした感染予防策がとられていることである。マリア・テレージアは、息子の治療に当たった医師ファン・スヴィーテンに「とても愛おしい息子の命が救われたことで、神に次いであなたの治療、労苦、学知に私は恩義を感じています」と賞賛の言葉を手紙にしたためている[15)]。マリア・テレージアが神への祈りと医学的処置の両方に価値をおいていたことがわかるだろう。

マリア・テレージアは天然痘に対して神と対症療法に頼ったが、こうした態度は当時の宮廷では、それほど珍しいものではなかった。だからと言ってマリア・テレージアが一部の貴族の間ですでにおこなわれていた天然痘の予防接種について無知だったわけではない。1763 年 6 月 10 日に子供に予防接種させたザクセン選帝侯妃マリア・アントーニアに対して送った手紙の中で次のように

13）HHStA, OMeA, ZA-Prot. 26 (1757−1758), fol. 14v-15v.
14）HHStA, OMeA, ZA-Prot. 26, fol. 19r.
15）Arneth, Briefe der Kaiserin Maria Theresia an ihre Kinder und Freunde, Bd. 4, S. 237; Vgl. Stollberg-Rilinger, S. 506.

接種に触れている。

> 私はこの手紙を、安全ですが少々遠回りな方法で送っているので、どうか燃やしてください［前段にポーランド王位継承問題について外交問題に踏み込んだ内容があるためだと考えられる］。あなたとあなたの素敵な家族が健康であることを願っています。アメリー姫やテレーズ姫にも接種されたと聞いていますので、その成功を心待ちにしています。ご子息を亡くされた後、この機会に、他のお子さんたちのためにすぐに解決方法を見つけようと大きな勇気をたくさん示されました[16)]。

この手紙に対してザクセン選帝侯妃は 7 月 7 日に次のような返書をした。

> 私の子供たちに興味を持ってくれていることにたいへん感謝しています。アメリーは幸いにも天然痘を克服しましたが、最年少の子たちについてはまだ予防接種を受けさせていません。陛下は私の勇気を賞賛しておられます。哀れなヨーゼフの死が私に与えた残酷な印象が、私をこの暴力的な決意に駆り立てたのですが、それは何度も悩んだ末のことでした。幸いなことに、私の 3 人の子供たちはみな無事に成功しました。現在、私たちは神に感謝しつつ、健康に過ごしています[17)]。

最初の手紙でマリア・テレージアは天然痘で息子を失ったマリア・アントーニアが即座に他の子供たちに予防接種を受けさせることを決断した勇気をたたえている。失敗リスクもあった人痘接種法[18)]に対してマリア・テレージアはおそらく不安を感じていたのだろう。彼女も 1761 年に次男カール・ヨーゼフを天

16）Lippert, S. 167. ザクセン選帝侯妃マリア・アントーニアはバイエルン選帝侯の娘であり、マリア・テレージアとは従妹の関係にあった。
17）Lippert, S. 168–169.
18）人痘接種法については次章で詳しく説明する。

然痘で失っているが、この時は残された自分の子供たちに予防接種を受けさせることはしていない。2つ目の手紙からは、ザクセン選帝侯妃が実子ヨーゼフの死をきっかけに苦悩の末に予防接種を実施させたことがわかるだろう。天然痘の予防接種は、継承問題が常に問題となる王朝国家にとって子供の生死を掛け金とした1つの政治的決断であり、その決断には勇気がいることだった。

ハプスブルク宮廷では依然として天然痘の予防接種には慎重な姿勢が支配的だった。例えば、1765年4月17日、ヨーゼフ2世の二番目の夫人マリア・ヨーゼファは、姉であるザクセン選帝侯妃マリア・アントーニアに次のような書簡を送っている。

> 親愛なるお姉様。子供たちの心配から解放されたとあなたから直接聞いて、とても嬉しく思っています。ここ［ウィーン］では、あなたがマリアンヌ［末娘テレーゼ・マリア・アンナ、1761年生まれのこと］とマクシミリアン［1759年生まれの末息子］に予防接種を受けさせるつもりだと言われています。あなたの息子はとても気弱ですけど、その息子のようにこの手術をしなくてもいいほどうまく天然痘を克服することを心より願っています。ここには、家族の中に天然痘にかかっていない人が5人います。3人の大公［レーオポルト、フェルディナント、マクシミリアンのこと］と、エリーザベト大公女、ヨーゼファ大公女です。天然痘はかかる必要のない病気です。私はあまりその心配しておりません。神様が私を必要としているのなら、私は神様の手の中にいるのだから、神様が好きなように私をいかようにも意のままにしてもいいのだ、といつも考えています。皇后陛下も私もそれにかかっていませんし、この病気以外でなくなった人や、高齢でかかってもちこたえた人もたくさん知っています。私たちは創造主さまに身を委ねなければならないのです。私たちにどのような死をもたらすかは、彼が選択することであり、彼の恩寵であれば、あとは私には

どうでもいいことです[19]。

この手紙には敬虔なカトリックの貴族女性の死生観が現れている。マリア・ヨーゼファは明らかに天然痘の予防接種には否定的であり、病気に対しては神に運命を任せるべきだと考えている。果たして、この手紙を書いた本人は1767年に天然痘で神の元へと旅立った。

1767年のウィーン宮廷での天然痘の流行は多くの悲劇を生んだ。宮廷長官だったケーフェンヒュラー＝メッチュ侯爵によると、1767年5月22日早朝に、マリア・ヨーゼファは天然痘を発病し、免疫をもつ皇帝ヨーゼフおよびその数日前に流産し、産褥熱で伏せていたマリア・クリスティーナをのぞいて、皇族は全員ウィーンを離れシェーンブルンへと退避することになった。マリア・テレージアがケーフェンヒュラー＝メッチュに語ったところによると、「今朝方、彼女［マリア・テレージア］はこの患者から離れ、別れの際に（前の皇妃や天然痘にかかった子供たちにいつもしていたのと全く同じように）彼女［マリア・ヨーゼファ］に抱擁した」。ファン・スヴィーテンは、天然痘は発症時よりも膿んでからのほうが感染しやすいとしてマリア・テレージアを安心させようとしたが、ケーフェンヒュラー＝メッチュからすると、マリア・テレージアは「実際にこのこと［抱擁したこと］について不安を少し抱いているように見えた」ようだ[20]。24日には、予定されていたシェーンブルンでの日曜公開ミサが中止された。その後、マリア・テレージアがマリア・ヨーゼファの病床に夜中の3時まで付き添い、その後、激しい頭痛と変調に襲われたと噂になり、誰もが仰天したという。午後2時頃、マリア・テレージアには瀉血が施され、家族はシェーンブルンからウィーンへと戻るように手配された。ただし、天然痘にかかっていない2人の大公とその妻（2人とも天然痘罹患済だが、夫と引

19）Lippert, S. 457.

20）Khevenhüller-Metsch, Bd. 6, S. 237. マリア・テレージアはこのときケーフェンヒュラー＝メッチュ侯爵に対して、ヨーゼフの結婚生活の不幸な状況や彼の態度が前の妻の時と異なり、悪い評判につながるかもしれないこと、統治する皇帝として行動しようとしないことについても語っている。

き離さないため)、エリーザベトとヨーゼファは、必要な人員とともにシェーンブルンに滞在し続けることとなった。こうした状況となり、王宮内で働く使用人とシェーンブルンで働く使用人との間で常時いかなるコミュニケーションもとらないよう厳命された[21)]。王宮を隔離したことは皇族における更なる感染者を増やす事を防いだと考えられるが、状況は芳しいものではなかった。25日、一向によくならないマリア・ヨーゼファには終油の秘蹟がおこなわれた。ケーフェンヒュラー＝メッチュは、同時に3人の皇族が危篤状態にあることを史上稀な痛ましい出来事として記録し、産褥熱で苦しむマリア・クリスティーナもマリア・テレージアも高熱で、2人とも2回目の瀉血がおこなわれた[22)]。26日になると、マリア・クリスティーナの病状は好転してきたが、マリア・テレージアには天然痘が大量に発生し、依然として高熱に苦しめられていた[23)]。27日にはウィーン市内や近隣のすべての教会で祭壇の聖餐が公開され、祈祷がおこなわれた。病状の重いことを知って大量の民衆も近隣の村落から集まってきたようだ。宮廷官吏もみな宮廷礼拝堂に集まり祈祷するように命じられている。皇帝ヨーゼフも母を心配し、病室近くにベッドを置いて看護に当たったという[24)]。28日には、皇后ヨーゼファが28歳の若さで死去し、翌日には棺に納められ、宮廷礼拝堂で通常通り安置公開され、30日にカプツィーナー教会への埋葬がおこなわれた[25)]。6月1日、マリア・テレージアの病状は悪化し、終油の秘蹟が発表された。ケーフェンヒュラー＝メッチュも次のようにこの発表がいかに宮廷全体に大きな動揺を与えたかについて書いている。

21）Khevenhüller-Metsch, Bd. 6, S. 238.
22）Khevenhüller-Metsch, Bd. 6, S. 238−239.
23）Khevenhüller-Metsch, Bd. 6, S. 239.
24）Khevenhüller-Metsch, Bd. 6, S. 239−240.
25）Khevenhüller-Metsch, Bd. 6, S. 241−242. この間も、マリア・テレージアの病状は回復しておらず、ケーフェンヒュラー＝メッチュの記述もほとんどないことから、マリア・ヨーゼファの葬送儀礼に皇族は参列していないと考えられる。これをマリア・ヨーゼファに対する冷酷な仕打ちとみなすこともあるが、当時の状況を考えると、やむを得なかったと言わざるを得ない。Vgl. Stollberg-Rilinger, S. 508.

これに関して発表がおこなわれ、とくに厳かで死を思わせる儀礼がおこなわれた際に、みなの茫然自失がいかに大きかったか、言葉で説明するよりも簡単に想像できるでしょう。私たちがちょうど昼食を終えた頃に、宮廷伝奏官がミサを知らせたが、涙でほとんど発表することができませんでした。私は宮廷に駆けつけ、皇帝の元に駆け上がると、彼はちょうど泣きはらした目で病人のところから出てきたところでした。彼女は彼と残りの家族に母の祝福と最後の教訓と指示を驚くべき毅然さで伝えたのでした[26)]。

このとき、マリア・テレージアは死を覚悟し、宮廷もその時が来ることを予期していた。ただ、この翌日よりマリア・テレージアの病状は快方に向かった。6 月 14 日、ウィーンの教会で感謝祭がおこなわれ、12 人の孤児に年金 30 グルデンが与えられ、治療に当たったファン・スヴィーテンは聖シュテファン騎士団に叙任された[27)]。

この天然痘の罹患と回復は色々な意味でマリア・テレージアに大きな影響を与えた。彼女は 1765 年の夫の死で軽鬱状態にあり、公式行事から姿を消して

26）Khevenhüller-Metsch, Bd. 6, S. 242. なお、宰相カウニッツ＝リートベルク侯爵も主君の天然痘罹患に大変なショックを受け、トラウマ的な恐怖に駆られていることが「私に友情を持つすべての人に宛てた秘密の注意」と題する書状からうかがい知れる。
「数年前、私たちの皇后陛下の大切な日々を脅かす大病を患った時、私はこの偉大な皇后陛下への個人的な愛着からこの病気の観念に非常に強くショックを受け、それ以来、この病気の名前を聞くと、身震いせずにはいられなくなり、すぐに呼吸が締め付けられ、全身が震え、想像を絶する苦痛を感じるようになりました。
そのため、
1. 私の前では、問題となっている病気や、それに少しでも関係するようなことは、決して口にしないこと。そして、したがって
2. 印刷されたものでも手書きのものでも、どんなものであれ、私に読み上げるときは、例外なく、決して読まずに、読んでいる最中に、この主題やそれ［天然痘］に関連する可能性のある項目を読み飛ばすように、細心の注意を払うことに気をつけてください。あなた方がこのような配慮をしてくださることは、私にとって大きな貢献になるでしょうし、私はあなた方にとても感謝することでしょう。」
Arneth, Geschichte Maria Theresias, Bd. 7, S. 547−548.

27）Khevenhüller-Metsch, Bd. 6, S. 244−245.; Stollberg-Rilinger, S. 511.

いたが、病気からの回復を機に公務復帰を果たした。7 月 22 日に、マリア・テレージアが市内の教会に現れたとき、臣民たちは歓声で君主の復活に応えた[28)]。この様子は、『ウィーン日報』を初めとする様々なメディアで報じられ、1767 年 6 月および 7 月にマリア・テレージア回復を賛美するパンフレットが 40 冊ほど出版された[29)]。医学では太刀打ちできない病気に対して神の祈りが勝利したという構図でマリア・テレージアの回復は描かれた。ザンクトマルクス孤児院の医師マクシミリアン・ロッヒャーは『われらが敬愛するマリア・テレージア陛下の期待された幸運な回復に関する王立貴族テレジア学校に宛てた回状』の中で、絶望的な病気に対して「このような祈り、われわれの居城都市ではいまだ経験したことのなかったみなの祈りは、われらが慈悲深き女性の命を守り、健康を回復させた」とウィーン市民全体の祈祷が神に通じたという形でこの出来事を捉え神に感謝している[30)]。回復を神の恩寵として捉えたのは、臣民側だけではなく、マリア・テレージア自身もそうだった。後年、マリア・テレージアは 1771 年 10 月 1 日の手紙の中でインスブルックに滞在していた息子フェルディナントに夫の死で失っていた気力を取り戻すきっかけとなった天然痘からの回復について語っている[31)]。天然痘がマリア・テレージアにとって

28）Khevenhüller-Metsch, Bd. 6, S. 252.; Stollberg-Rilinger, S. 510.

29）Werner Telesko, Sandra Hertel und Stefanie Linsboth, Zwischen Panegyrik und Tatsachenbericht: Zu Struktur und Zielsetzung von Medienereignissen zur Zeit Maria Theresias, in: *Zeitschrift für Historische Forschung*, 44 (2017), S. 469.

30）Maximilian Locher, *Sendschreiben an das Theresianische Kollegium über die Genesung Ihrer Kaiserl. Königl. Apostol. Majestät Maria Theresiens unserer Allergnädigsten Frauen*. Wien, 1767, S. 5. Vgl. Telesko et al. S. 470.

31）「あなたが受け取るのは、私の一時的な幸せが終わったこの場所［インスブルックのこと］で、もしあなた、私の親愛なる子供たちがいなかったら、私は、神が私をこの世に縛りつけていたすべてのものを取り去ったこの場所に動かず留まっていたでしょう。5 歳の頃から、私の心はこの比類なき夫以外にはありませんでした。天然痘以来、私は再び姿を現し、私の悲しい余生を、頭が耐えられる限り、最後の努力をして、国家のために尽くし、役に立たたせるため、国家のために二度目の犠牲を払ってきました。しかし、引退したいという気持ちがしばしばよみがえり、特に、夫が人生を終えた場所で自分の人生を終えたいと思うようになりました。この場所が、あなたや私の子供たち、そして全人類にとって不吉な場所であることがわかるでしょう。神の目の前に立って弁明をするのは一瞬であり、永遠にあなたの運

人生の画期になったことは間違いないだろう。

しかし、1767 年の天然痘の流行はこれだけではおさまらなかった。宮廷内で第二波の流行が生じたのだ。1771 年 10 月 4 日、マリア・テレージアは娘マリー・クリスティーネにこの流行の発端を明らかにする手紙を送っている。

> 今月は非常に強烈な逸話があります。今日［10 月 4 日］はヨーゼファが私と一緒に地下霊廟に入って天然痘を患って 3 年目［実際には 4 年経っている］になります。明後日は私たちの比類なき家族［ヨーゼフ 2 世の最初の妃イザベラのこと］の結婚記念日で、明日はあなたの義父［ポーランド王＝ザクセン選帝侯アウグスト 3 世］の命日、15 日はあなたの妹の命日で、今年は非常に重要な日です［息子フェルディナントが結婚する日］[32]。［後略］

ここで、マリア・テレージアが述べているように、彼女は、1767 年 10 月 4 日に 15 日に婚姻を控えた娘マリア・ヨーゼファとともにカプツィーナ皇帝霊廟に敬虔な子孫として先祖に暇乞いをするために訪れた。ケーフェンヒュラー＝メッチュ侯がいうには、事前に窓を開けて換気をしたとはいえ、地下霊廟には 6 月に亡くなった皇后マリア・ヨーゼファの死体が安置されており、その遺体は棺が完成していないため、布で覆われている状態であり、地下霊廟訪問が天然痘の原因と記録された[33]。この感染により、大公女マリア・ヨーゼファは、10 月 10 日に終油の秘蹟をおこない[34]、10 月 15 日、結婚式の予定日に天然痘で亡くなった[35]。10 月 21 日には、姉マリア・エリーザベトも天然痘に感染してい

命は決まっていることを忘れないでください。」Arneth, Briefe der Kaiserin Maria Theresia an ihre Kinder und Freunde, Bd. 1, S. 70−71.

32）Arneth, Briefe der Kaiserin Maria Theresia an ihre Kinder und Freunde, Bd. 2, S. 373. 編者アルネトはこの手紙をマリア・ヨーゼファの感染ルートを裏付ける有力な証言とみなしている。

33）Khevenhüller-Metsch, Bd. 6, S. 273−274.

34）Khevenhüller-Metsch, Bd. 6, S. 271−272.

35）Khevenhüller-Metsch, Bd. 6, S. 272−273.

ることが発覚した[36]。彼女の場合は、終油の秘蹟をおこなうほど危ない状態になったが、回復した。しかし、天然痘による痘痕は彼女の美貌を損ない、生涯を独身で過ごすことになった[37]。こうした1767年の宮中での天然痘流行は、マリア・テレージアに大きな衝撃を与え、彼女はおそらくこの経験から天然痘の予防接種の実施を決意したと考えられる。

3. 天然痘の予防接種

18世紀半ばのヨーロッパには、これまで述べてきたウィーン宮廷のように神頼みと対症療法しか、天然痘に向き合う方法がなかったわけではなかった。すでに、天然痘を予防する方法として、人痘接種法がオスマン帝国からイギリスに伝達されていた。1716年から1718年までコンスタンティノープルに駐在したイギリス外交官の妻メアリー・ウォートリー・モンタギュー(Mary Wortley Montagu)は、オスマン帝国でおこなわれていた天然痘の予防接種の存在をロンドンに知らせた。1717年の公開書簡の中で彼女は、オスマン帝国では天然痘の漿液が入った木の実の殻を携えた老婆に小さな血管を切らせて生きたウィルスを少し塗らせ、傷口を縛る措置をし、軽度の病気を経て生涯免疫を得る風習があることを紹介している。彼女は翌年の春には自分の子供にこの予防接種を受けさせ成功を報告し、イギリスに戻るとこの方法を一般的に普及させるために精力的に活動した[38]。1721年および1728年にイギリスで最初の実験がおこなわれている[39]。1722年に天然痘ですでに1人子供を失っていたウェールズ王太子妃キャロラインは自分の子供たちに予防接種を受けさせてい

36) Khevenhüller-Metsch, Bd. 6, S.275.
37) Artneth, Geschichte Maria Theresia's, Bd. 7, S. 270–286. アルネトの記述から、エリーザベトは姉妹の中でも大変美しかったが、天然痘のためにその美貌を失い、そのことがルイ15世との縁談に一定の影響を与えていたことがわかる。
38) Frank T. Brechka, *Gerad Van Swieten and His World 1700–1772*, pp. 115–119.
39) Wimmer, S. 116–121.

る[40)]。また、フランスの哲学者ヴォルテールは『哲学書簡』（1734 年）の中で、イギリスでおこなわれている種痘について紹介し、フランスで広まらないことを嘆いている[41)]。

天然痘の人痘接種は、ハプスブルク君主国でもトランシルヴァニアのシャーロシュ県の医師ヨハン・アダム・レイマン (Johann Adam Raymann) がギリシア人とアルメニア人から学び、すでに 1717 年にはプレショフでおこなわれていた[42)]。ただ、この最初期の実験接種はこれ以上広がることはなかったようだ。マリア・テレージア期のウィーンでは侍医のファン・スヴィーテンを筆頭に予防接種に対して慎重派が多かった。これは、ファン・スヴィーテンの師匠にあたるブールハーフェ (Herman Boerhaave) が予防接種に否定的な見解を示していたため、オランダの医師には反対派が多かったことが関係している。ウィーン大学医学部筆頭医であったアントン・デ・ヘーン (Anton de Haen) も強力な予防接種反対派であり、その言論は内外に影響を与えた[43)]。1767 年の宮廷内での天然痘の流行は、医師の反対が多かったハプスブルク宮廷で、こうした状況を一変させた。

1768 年 1 月にマリア・テレージアは、イギリス王室に予防接種について照会し、医師の派遣を要請している。それと並行して、3 月 20 日にはザンクトマルクス孤児院で 6 名の新生児に接種実験がおこなわれ、2 名別の原因で死亡したが、実験は成功し、追加で 28 名の新生児および 67 名の子供に接種をおこない、成功した。5 月 14 日にはイギリスから派遣された接種医ヤン・インゲンハウス (Jan Ingenhousz) がウィーンに到着し、民衆の子供に接種実験をおこなった。この成功を受け、1768 年 9 月にマリア・テレージアの息子フェルディ

40）A F M Stone and W D Stone, Lady Mary Wortley Montagu: Medical and Religious Controversy following Her Introduction of Smallpox Inoculation, in: *Journal of Medical Biography*, 10 (4), 2002, pp. 232−236, here 233.

41）ヴォルテール（斉藤悦則訳）『哲学書簡』光文社 2017 年（原著 1734 年）Kindle 版 No. 893−901

42）Lesky, S. 141; Wimmer, S. 117.

43）Lesky, S. 142−144. Stollberg-Rilinger, S. 513.

ナントとマクシミリアンおよびヨーゼフ2世の娘テレージアに接種がおこなわれた[44)]。ウィーン大学医学部を中心とする君主国の医療専門家が予防接種に懐疑的であったことをふまえると、ここではマリア・テレージアのトップダウン的な意志決定がみられる。

この時、ヨーゼフ2世は弟のトスカーナ大公レーオポルトに予防接種の成功を確信しつつも不安な心情を手紙で吐露している[45)]。こうした不安をはねのけ、成功に終わった予防接種について、1768年10月1日付『ウィーン日報』は詳細に報道した[46)]。天然痘予防接種成功は新聞で報道されることで、また冒頭で

44）Lesky, S. 148−149. Stollberg-Rilinger, S. 513−514. なお、アルネトが採録したフェルディナント宛の日付不明の手紙をみると、子供たちの側から予防接種を受けたいという希望があったことがわかる。
「親愛なる息子たち、あなた方が以前から示していた予防接種を受けたいという希望について書いた手紙が私を決心させました。接種の日を決めるために、皇帝の帰還を今しばらく待ってください。その間に、あなた方は食事療法を受けることになり、今日から始まることを経験して、私を喜ばせてくれることでしょう。しかし、同時に私はあなた方におそらく無駄に今日から休暇を与えるかもしれません。あなた方が節度と理性を持ってこれを利用し、宗教の義務を怠ることなく、また時間を無駄にすることなく、快適に過ごしてくれ、私にこのような慰めを与えてくれることを疑っていません。その一方で私たちはあなた方をこの病気と結びついている病状や不快感から守ることに努めます。たとえちょっとした不快なことがいくつかあったとしても、神様が私たちみなに慈悲を恵み、幸運に過ごさせてくれることを望んでいます。さようなら。」Arneth, Maria Theresia an ihre Kinder und Freunde, Bd. 1, S. 61.

45）「親愛なる弟よ！［中略］現在、先週の土曜日の午後に行われた2人の弟と私の娘への予防接種で、私たちはとても忙しくしています。今のところ、外見はすべて良好で、散歩に出かけたり、飛び回ったりして、一日中楽しく過ごしています。彼らが病気になるのは明日か明後日であり、近日中の郵便で、発疹が間もなく起こり、結果的に最も重要な時期が既に過ぎていることをあなたにお知らせできればと思っています。いくらこの方法の有用性を確信していても、それが過ぎ去るのを心待ちにしているし、待っている間に大きな不安を感じていることは否めません」。（1768年9月15日）Arneth, Maria Theresia und Joseph II. Ihr Correspondenz, Bd. 1, S. 231−232.

46）*Wienerisches Diarium* vom 1. Oktober 1768, Nr. 79, S. 6−7.
「先月9月10日、フェルディナント大公とマクシミリアン大公、および皇帝陛下の娘テレージア大公女が、この目的のためにここに招聘されたオランダの有名な医師インゲンハウス氏によって天然痘の予防接種を受け、大成功を収めた。その後、殿下たちは15日まではかなり元気で、熱が出ていたが、これは容体の順序が求める通りだった。天然痘の発生は18日に始まり、4日間続き、24日まで化膿が続き、

紹介したように記念硬貨となることで、国家事業として公的に顕彰された。インゲンハウスの伝記を書いたユリウス・ヴィースナーによると、皇室の子供たちへの予防接種成功は宮廷内で大きな注目を集め、他の貴族たちの予防接種を促進したという[47)]。

1769 年 5 月にはフィレンツェにインゲンハウスが派遣され、まだ天然痘に罹患していなかった三男レーオポルトに人痘接種が実施された。インゲンハウスはこの時の様子を友人デッカースに宛てた手紙（1769 年 5 月 10 日）の中で以下のように語っている。

> トスカーナ大公への予防接種は、私の医療上の最大の成功でしたが、同時に、私が陥っていた言いようのない不安を思い起こさせ、私の健康が打撃を受けていることを鮮明に感じさせました。予防接種後の大公の病気は軽症で済み、殿下は一日も寝込むことはありませんでしたが、私は常に何かの事故による影響を考慮しなければなりませんでした。そのため、このような重要な問題を自分で引き受けるように言われた人は、震えなければなりません。私は世界でただ一人、ヨーロッパで最も輝かしく親愛なる 4 人の命を救った男です。今では他の王子に予防接種をする野心はなく、ただ平和に日々を終えたいと願っています[48)]。

この書簡からは当時における先端医療である人痘接種法の不確実性に苦慮し、身分の高いものに対して予防接種を実施する医師に相当の重圧がかかっていた

---

29 日には再び天然痘がおさまった。接種してから完全に回復するまで、殿下たちは日中ベッドに横になることはなく、いつもすぐに外出し、すぐに庭園やシェーンブルン宮殿のホールを歩いていた。フェルディナンド大公は天然痘の数が平均的で、マクシミリアン大公はそれよりもはるかに多く、大公女はほとんどなかった。」

47）Julius Wiesner, *Jan Ingen-Housz: Sein Leben und sein Wirken als Naturforscher und Arzt*, Wien 1905, S. 31.
また、予防接種を成功させたインゲンハウスは 5 月 14 日に遡って年給 5000 グルデンという破格の待遇で侍医として任命された。Wiesner, S. 233.

48）Wiesner, S. 38. より引用。

ことが読み取れる。兄のヨーゼフ2世は5月16日にフィレンツェを訪問し、接種を受けて不安げでやつれた弟の様子をつぶさにマリア・テレージアに報告し[49]、5月22日の手紙では予防接種について以下のように書き記している。

> 親愛なる母上様。最後の手紙が私にもたらした知らせに非常に謹んで申し上げます。私がフィレンツェに戻り、予防接種の重要な時期に私が滞在することに関してあなたの意図を幸運にも正しく推測できたことに再び喜びを感じています。私は弟のために、そしてあなたのために役に立っていると信じています。それが私の望むすべてです。この予防接種は、ここでも、またあらゆる方面であまり評価されていませんでした。あえて言えば、私が必要だったということです。弟はとても心配性で、実際よりも1000倍悪いことを想像していました。残念なことに、彼は医学の知識を持ちすぎていて、与えられた治療薬を想定される効果も含めて精査し、自分が想像していた通りにならないとすぐに悩んで動揺してしまいます。彼を怒らせることになるので、陛下はこのことを彼に言わないようにお願い申し上げます[50]。

ヨーゼフはフィレンツェにおいても予防接種が評価されず、医学知識をもつレーオポルト自身を相当な不安に陥れていたことを包み隠さず書いている。それだけに、子供たちに予防接種を受けさせるという決断は革新的な措置だったといえる。また、ヨーゼフの手紙によると、レーオポルトも何人かの人に予防接種を受けさせようと計画していた[51]。君主から宮廷内の貴族へと予防接種が広がっていく様子がわかるだろう。

1769年5月28日の衛生宮廷代表団の議事録では、シュタイアーマルクにおいて天然痘の予防接種の普及をどのように進めるか、議論され、3つの提案が

49）Arneth, Maria Theresia und Joseph II. Ihre Correspondenz, Bd. 1, S. 270.
50）Arneth, Maria Theresia und Joseph II. Ihre Correspondenz, Bd. 1, S. 271−272.
51）Arneth, Maria Theresia und Joseph II. Ihre Correspondenz, Bd. 1, S. 275−276.

なされている。すなわち、貧民層の子供たちへの無料接種、貴族の先行接種、医師の協力である。そして、地方医師に対する予防接種の指導の必要性も訴えられている[52)]。国家の方針として費用を抑え、君主や貴族がまず範を示し予防接種をおこなっていくことで自発的な接種行動を促そうとしていることがわかる。インゲンハウスはフィレンツェからウィーンへ戻る前に、トリエステ、ゲルツ、ライバッハ、クラーゲンフルト、グラーツに立ち寄り天然痘の予防接種の指導をおこなうこととなった[53)]。たとえば、インゲンハウスは9月半ばにグラーツに立ち寄り、領邦官庁によって選ばれた数人の領邦医に人痘接種法を教授し、6人の子供たちに対して実際に予防接種をやってみせている。この費用はすべて君主の国庫から捻出された[54)]。

上述のシュタイアーマルクにおける予防接種普及に関して国務顧問官シュトゥーパン（Anton Maria Stupan von Ehrenstein）は次のような所見を示している。

> 陛下の意思は人痘接種あるいは天然痘の予防接種を自分の諸領邦で命じるまでには至らなかった。しかし、医学は経験以外の何ものでもないので、よその諸邦で長年にわたって、ここウィーンだけでなく、ほとんどのドイツやその他の諸邦でも次のようなことが判明している。100人の子供のうちおそらく2人も死なず、その他のものは事故に遭ったりしないが、その一方で天然痘の発生によって少なくとも30人が亡くなってしまう。そしてまるで自然の天然痘が後に続くかのような泰然とした偏見はまだ変わっていない。［中略］
>
> 私はシュタイアーマルクと他の世襲領でこの天然痘の予防接種が強制され

52）この議事録は以下に収録されている。Wiesner, S. 233–234. こうした議論を追う限り、1769年5月、レーオポルトの接種成功とともに、政府はより明確に予防接種普及へと舵を切っているように思える。

53）Wiesner, S. 40, S. 235; Wimmer, S. 118; Lesky, S. 152.

54）Wimmer, S. 118.

ることなく開始され導入されるならむしろ有益であり望ましいと考えている[55)]。

マリア・テレージアによる予防接種推進は強制ではなく、天然痘の予防接種は親が自らの意志で子供に受けさせるものだった。皇帝の侍医アントン・シュテルクも予防接種にまれに事故があることから接種を強制することには慎重だった[56)]。1772 年 9 月にレーオポルトの長男フランツと娘アンナ・マリアに予防接種がおこなわれたとき、マリア・テレージアはヘルツェレス伯爵夫人(Christine-Philippine de Herzelles)への書簡（1772 年 10 月 2 日）の中で不安な心情を吐露している。

> （インゲンハウスから）［レーオポルトの］長男［後のフランツ 2 世］と末娘がフィレンツェで接種しています。二人とも、特に息子がひどい症状です。正直に言うと、それは私にとってもう一つの打撃になるかもしれないと恐れています。インゲンハウスは恥じて、「接種者にこれほど多くの天然痘が出たのは初めてだ」と言っています。正直言って、私は心穏やかではありません。それはとても不幸なことです。この子は非常に有望で、この［レーオポルトの］子供たちの中で最も健康だったのです[57)]。

結果としてこの時の接種も成功したが、この手紙からは予防接種に失敗してフランツが死ぬのではないかと考えていたことがわかる。人痘接種法の不確実性は後継者問題を抱える君主にとって重大なリスクの 1 つだった。

55）Wiesner, S. 234. Vgl. Lesky, S. 150.

56）Lesky, S. 150.

57）Kervyn de Lettenhove, *Lettres inédites de Marie Therèse et Joseph II*, Bruxelles, 1868, S. 39–40. ヘルツェレス伯爵夫人はヨーゼフ 2 世の娘マリア・テレージアの養育係を務めていた人物であり、1770 年初頭にヨーゼフの娘が亡くなってからは、南ネーデルラント（ベルギー）のナミュールで過ごし、マリア・テレージアと文通していた。Lettenhove, S. 3–6.

法規による義務化などはおこなわれなかったが、天然痘の予防接種はマリア・テレージアの意志によって特別に推進されていた。1770 年、大学の教科書としても使用されていたヨーゼフ・フォン・ゾンネンフェルスの『ポリツァイ学・商学・財政学の基本原理』の第 3 版では、1768 年の皇族の予防接種成功を受けて、天然痘の予防接種について加筆されている[58)]。この加筆は言うまでもなく、予防接種の有用性を将来の官僚に対して説くためのものであり、国家の意思が反映されたものだといえるだろう。

予防接種院の設置と予防接種専門医の育成という 2 つのアプローチで予防接種の普及は進められた。1770 年末にウィーンのレンヴェーク孤児院の隣に 14 室 80 人が収容できる新しい予防接種院の建設が計画された。マリア・テレージアは貧しい者も富める者も、非貴族も貴族も区別なく同じ施設に受け入れることを強調した[59)]。しかし、この予防接種院は、マリア・テレージアの死後である 1787 年 5 月 20 日にようやく開院することとなった。史料の欠損からここまで遅延した理由はわからないが、ヨーゼフ 2 世はウィーン総合病院の院長ヨーゼフ・フォン・クヴァリン (Joseph von Quarin) および種痘医ヨハン・アントン・レヒベルガー (Johann Anton Rechberger) など接種推進派の意見を取り入れて政策決定したようだ[60)]。

マリア・テレージアにとって、医師に対する予防接種訓練の推進も重要な施

58）「たとえば子供の天然痘のように、疫病とほぼ同じくらいの荒廃を引き起こす病気もかなりある。こうした荒廃を防ぐことは市民を守るために必要な予防措置の一部である。ここでは、予防接種とその利点の薬理学的な調査に立ち入らない。人類の大部分が天然痘にかかる確率を計算すると、何もしていない天然痘の場合には、正確な観察によると、1 人に対して少なくとも 200 人（他の人によると 400 人）が死ぬ。予防接種したものの場合、比率は逆転する。このしばしば行われた計算は私には決定的に思える。皇子ご自身を対象にした実験が行われ、幸せな成功によって、誰もが恐れずに後に続くように促されたことがわかっている。」Sonnenfels, 1770[3], S. 244–245.
予防接種肯定の原理として統計的推量が用いられているが、こうした見解は先に引用した国務顧問官シュトゥーパンの主張にも共通するものである。

59）Lesky, S. 150. レスキーは、1770 年 12 月 22 日宮廷政庁提案に対する 1770 年 12 月 29 日の決議を参照している。

60）Lesky, S. 151.

策であったが、これもなかなか進まなかった。ウィーンでは、1776 年にウィーン大学の予防接種反対派医師デ・ヘーンがなくなり、マクシミリアン・シュトールが臨床講座を引き継ぐと、1780 年以降、毎年 5 月にウィーン郊外で予防接種講習会が開催されるようになった。1787 年に前述の予防接種院が開設されると、そこで講習会を実施するようになった。レスキーによると、この講習会は君主国の接種医を養成しただけでなく、国外からの受講者もたくさん受け入れていたようだ[61]。1795 年秋に臨床講座を引き継いだヨハン・ペーター・フランクは、限られた医学部教育の中で時間のかかる予防接種講座を不要と考えたが、政府は予防接種の評判に悪影響が出ることを懸念し、講座を維持し、臨床講座内では講義のみおこない、実習は総合病院でおこなうこととした。1801 年に新しい予防接種方法である牛痘接種法がウィーンにも入ってきたとき、フランクは自分の診療所で牛痘接種法の公開接種実験をおこない、この方法は国家承認をえることとなった[62]。ただし、予防接種への不信感はなかなか払拭できず、地方に広まるまでかなり時間がかかったようだ。

おわりに

本稿ではマリア・テレージアがどのように天然痘に立ち向かっていったのか、史料に基づき確認してきた。オーストリア継承戦争を経て即位したマリア・テレージアにとって、自分の子供たちは継承者としてまた政略結婚の道具として貴重な王朝資源であった。また、18 世紀は、官房学の発達によって、人口は国力と見なされ、人口増進をいかに実現するかが国家の課題に直結する時代であった。こうした背景から国家にとって出産の安全性や病気予防は重要な政策目標となった。死を運命と捉え病気を受け入れる考え方は、カトリック教徒の中では珍しいものではなかったが、マリア・テレージアは医学を神の贈り物として考え、天然痘の予防接種を積極的に推進した。一見すると信仰と啓

61）Lesky, S. 152–153.
62）Lesky, S. 153–154.

蒙は矛盾するように感じられるかもしれない。しかし、宗教的観念が支配する近世社会から科学に基づく近代社会への過渡期において、マリア・テレージアの場合は、信仰と医療が矛盾なく同居することとなった。

ただし、マリア・テレージアが特別であったと主張するのは、間違いである。マリア・テレージアがやりとりをしていた様々な書簡からは、ザクセン選帝侯妃のように、当時の貴族階級に予防接種が着実に広まっていたことが見てとれる。また、同時期にロシアの女帝エカチェリーナ 2 世も子供に予防接種を実施している。ヨーロッパ君主たちの書簡ネットワークによる成功例の情報共有が天然痘の予防接種を君主層の間で広めるきっかけになっていた可能性もある。本稿の主旨とは異なる貴族の情報ネットワークにおける人痘接種法の伝達について検証することはできなかったが、こうしたテーマについても今後考察の余地はあるだろう。

最後に蛇足となるが、目前の問題に対して何の提言もできない歴史家の限界について批判を目にし、自省することが増えた。こうした批判に対する歴史学者の真摯な応答として歴史学研究会編『コロナの時代の歴史学』の諸論考が非常に重要である[63)]。それに比して本稿には特別新しい知見も提言もなく、一般向けの講演をきっかけに、18 世紀の宮廷でおこなわれた天然痘対策について先行研究と史料をまとめたに過ぎない。本稿で述べてきた事例は、前提条件の違いから決して現在のパンデミックの比較対象にはならないだろうが、それでも 2020 年から 2021 年 1 月現在まで進行形で続くコロナパンデミックの中で 18 世紀ウィーン宮廷の感染症対策の様子を日本語でまとまった形で叙述することに何らかの意味があることを祈るしかない。

63） 歴史学研究会編『コロナの時代の歴史学』績文堂出版 2020 年。